

# 北海道豊富高等学校

課程 全日制  
学科 普通科  
生徒数 84名

## 1 取組の特徴

人間関係形成能力やコミュニケーションスキルを育成するためのトレーニングとしての集団カウンセリングの実施（質の向上）

集団カウンセリングで培ったコミュニケーションスキルを活かす機会を確保するための学校教育活動全体での取組（量の確保）

学級環境適応調査による生徒の学級満足度や適応状況の客観的な把握と、分析結果を用いた教育活動への効果的な活用（アセスメント）

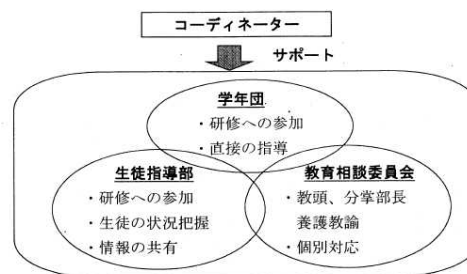
## 2 取組のねらい

地域性などの状況から、社会性や規範意識に乏しく、望ましい人間関係を主体的に構築できない生徒が近年、増加傾向にある。このことから、次の2点を本事業の取組のねらいとした。

幼少期より形成された固定化された人間関係の改善

望ましい人間関係を構築するための人間関係形成能力やコミュニケーションスキルの育成

<組織図>



## 3 取組の経過

- 3月・中学校との連携（入学する生徒の情報交換）
- 4月・構成的グループエンカウンターの実施  
LHR（学年開き） 宿泊研修  
・コーディネーターによる集団カウンセリング（ピア・サポート）の実施  
・学校環境適応調査の実施（第1回）
- 5月・教科授業（情報A）での実践  
グループ中心の言語活動の実践  
・朝のSHRにてエンカウンターの実施
- 7月・パートナーティーチャーによる授業参観と教育相談の実施（第1回）  
・特別支援委員会と連携し、希望生徒を対象として、放課後にビジョントレーニング（集中力を高めるトレーニング）の実施
- 8月・子ども理解支援ツール「ほっと」の実施と分析（第1回）

- 10月・パートナーティーチャーによる校内研修会の実施  
・コーディネーターによる集団カウンセリング（ピア・サポート）及び校内研修会（カウンセリング）の実施  
・学校環境適応調査の実施（第2回）
- 11月・生徒・保護者・教員が参加するシンポジウムのグループ別討論会の実施
- 12月・教科授業（情報A、書道）での実践  
グループによる言語活動と共同制作の実践  
・集団カウンセリング研修会への参加  
・パートナーティーチャーによる授業参観と教育相談の実施（第2回）
- 2月・学級環境適応調査の実施（第3回）  
・子ども理解支援ツール「ほっと」の実施と分析（第2回）  
・高1クライシス未然防止のための自校プログラムの作成

## 4 取組の内容

### 1 集団カウンセリング

- (1) 日時 平成24年4月23日(月) LHR
- (2) 対象 1学年(34名)
- (3) ねらい 生徒たちが互いに思いやり、助け合い、支え合う人間関係を育み、他者をどう思いやるかについて学び、コミュニケーションスキルの向上を図る。
- (4) 内容 エクササイズ「共同絵画」 講話(写真)



### 2 教科授業での実践(書道)

- (1) 日時 平成24年12月18日(火)、平成25年1月29日(火)  
2月5日(火)
- (2) 対象 1学年(15名)
- (3) 内容 書道の共同製作
- (4) ねらい 一つの作品を共同で製作することを通して、構成的グループエンカウンターの実施により培われたコミュニケーションスキルの定着と向上を図る。

### 3 学校行事での取組(地域との連携「生徒・保護者・教師のシンポジウム」)

- (1) 日時 平成24年11月3日(土)
- (2) 対象 1~3学年(84名)
- (3) ねらい 集団カウンセリングで培った人間関係形成能力やコミュニケーションスキルを活かす機会を確保し、スキルの向上と定着を図る。
- (4) 内容 グループ討論(「豊高の今と未来」)

## 5 次年度に向けて

### 1 成果

- (1) 中途退学者及び不登校生徒数の推移(平成22年度~平成24年度)  
中途退学者、不登校生徒数ともに減少し、今年度については0名となっている。
- (2) 学級環境適応調査(アセス)の結果  
全ての適応次元の数値が、第1回(4月)に比して第2回(10月)は下がったものの第3回(2月)では回復している。担任を中心とした全ての教職員による支援体制の充実を図った結果、生徒が望ましい人間関係を徐々に形成し、学校生活や学習に適応し、集団的に安定している状況を示している。
- (3) 子ども理解支援ツール「ほっと」の結果  
第1回調査(8月)によると、1学年のコミュニケーションに関する13要素は、「挨拶や感謝」以外の項目が全道平均より低い傾向にあり、特に「発言や説明」「助言や注意」「自立」「緊張」は偏差値45.0を下回るなど、課題が見られる。
- (4) その他の指標による評価  
保護者対象の学校評価項目において、生徒の学校や学級への適応を図る項目について6~8割は好意的な評価がなされ、取組の成果が現れている。
- (5) 生徒の変容した姿  
生徒の学校への信頼感や帰属意識が高まり、集団としてのまとまりがでてきている。また、グループワークを取り入れた授業実践でも、生徒それぞれが役割を認識し、主体的に活動する姿勢が顕著になった。特に、学校生活における規律の遵守や身だしなみなどの社会性や規範意識の高まりが、保護者の学校評価アンケートから顕著である。

### 2 課題

- (1) 予防的・開発的教育相談の取組の効果を測るために、入学直後に実施している「アセス」に加えて、コミュニケーション能力を測定する「ほっと」を実施する必要がある。
- (2) 望ましい人間関係の構築のためには、人間関係形成能力やコミュニケーションスキルの育成について、3年間を見通し、計画的に実施する必要がある。
- (3) 小・中・高の連携をさらに推進して、学力や人間関係づくりなど社会性の育成のために町全体で取組を実践する必要がある。

### 3 次年度に向けて

- (1) 入学直後を含め、「アセス」と「ほっと」を計画的に実施し、その調査結果を校内研修会等で報告するなどして、生徒理解の一層の充実を図る。
- (2) 予防的・開発的教育相談の取組について、3年間を見通した年間計画を立案する。
- (3) 小・中・高の連携の中で、社会性の育成の取組を系統的に実践する。